

Interview

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第31回 キューバ

カルロス・ミゲル・ペレイラ・エルナン
デス駐日キューバ大使

今年は日本・キューバ 外交関係樹立 90 周年

— さらなる関係の進展を期待 —



キューバ共和国のペレイラ・エルナンデス大使は、ラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、キューバ革命 60 周年を迎えたキューバの政治経済情勢や日本との関係について見解を表明した。ペレイラ大使は、外務大臣室長、駐中国大使、外務省組織・企画・情報・分析局長等を歴任し、2016 年 10 月から駐日大使。一問一答は次の通り。

日本の印象

一大使は日本に着任されて約2年半になりますが、日本についてどのような印象をお持ちですか？ これまでの日本滞在で最も印象深い思いでは？

大使 キューバと日本の関係が歴史的な進展を見せる中、駐日大使を務めていることを大変光栄に思います。日本については、その歴史と文化、そして驚異的な経済社会発展に敬意と感銘を覚えます。日本人の利他精神や善意、さらにキューバに対する親近感も目の当たりにしました。この2年半の間に多くの印象深い出来事がありましたが、特に、日本の友人でもあるキューバ革命の偉大な指導者（フィデル・カストロ）の逝去に際して、日本の人々から心温まる弔意が寄せられたことは忘れがたいことです。また、広島及び長崎の原爆資料館等の訪問は強く印象に残っています。

キューバ革命60年の成果と課題

一今年はキューバ革命60周年です。キューバ革命がもたらした最も大きな成果は何だとお考えですか。革命後の歴

史の中で、キューバが直面した最も困難な局面や課題はどのようなものでしたか。

大使 今年1月、キューバ革命から60周年を迎えました。革命の勝利は60年にわたる米国のキューバ支配を終わらせ、人々の、人々による、人々のための社会を建設する新しい時代に始まりでした。革命後、キューバの独立を受け入れない隣の大国・米国は、軍事侵攻、威嚇、封鎖、破壊、メディア戦等を通じ、恒常的にキューバの主権、独立、自決権を脅かしました。キューバは、封鎖された開発途上の小さな島国であるにもかかわらず、革命の道を歩み、社会、文化、政治面で大きな成果を上げ模範的存在となりました。1990年代にソ連及び社会主義陣営の崩壊と米国による経済封鎖の強化の中で困難に直面しましたが、苦境を乗り越え、外交的孤立にも打ち勝ちました。今日、キューバは国連加盟国192か国中185か国と外交関係を持ち、124か国に大使館を構え、115か国の大使館及び6つの国際機関を接受しています。2018年だけでも、大統領・首相32人を含む144のハイレベル要人訪問がありました。

新時代を見据えた新憲法の採択

—今年2月、新憲法採択のための国民投票が行われました。このタイミングで新憲法を採択する理由は何ですか。新憲法による主な変更点は何でしょうか。外国からの投資は歓迎されますか。

大使 国民投票では有権者の90%が投票し、87%の賛成により新憲法が採択されました。国民投票に先立って行われた、新憲法に関する国民協議には、初めて国内及び国外にいる8百万人を超えるキューバ人が参加して自由に意見や提案を表明し、新憲法草案の約60%の条項が修正されるなど、真の参加型民主主義の下に新憲法は起草されました。

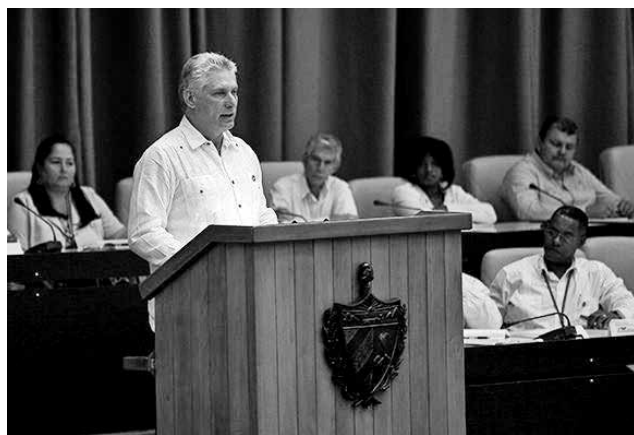
新憲法採択は、国家評議会メンバーの世代交代が行われたように、新時代に向けての歴史的な変遷プロセスの一部を構成します。新憲法採択により統治機構の整備と国家目標や権利の明確化が図られました。例えば、市場の役割の評価、私有を含む新しい所有の形態、経済発展のための外国投資の必要性など、近年導入された経済社会政策の重要な変更も盛り込まれています。政治分野においては、憲法及び法律の優位性を示す「社会主義法治国家」という新しい概念が盛り込まれました。共産党が国家と社会を率いる最高権力を持つ民主的な存在であることも確認されました。外交分野では、主権の尊重、協力と対話の原則を再確認し、国際的権利・多極性の尊重、帝国主義・ファシズム・植民地主義・新植民地主義等への反対、人権の擁護、軍縮の促進、核兵器の拡散・使用反対、気候変動との闘い等が盛り込まれました。

新しいリーダーの人となり

—昨年4月、約60年振りに国家評議会議長（国家元首）及び閣僚評議会議長（首相）にカストロ兄弟以外の人物、ミゲル・ディアスカネル・ベルムデス氏が就任しました。同議長はどのような人物ですか。優先的な政策課題は何ですか。

大使 ディアスカネル氏の国家評議会議長及び閣僚評議会議長就任は、キューバ革命以降に生まれた世代が初めて就任したという意味で画期的なことです。それはキューバ革命との決別ではなく、継続性を維持しつつ変革と拡充を図る新たな局面の始まりです。民主的で繁栄する持続可能な社会主義国家の建設という目標に向けて、新政権は努力を続けることになります。

ディアスカネル議長は、これまでの政治活動を通じ、優れた見識と人格を示しており、人民全権議会



キューバ ディアスカネル議長

でもほぼ全ての議員の支持を得て選出されました。同議長が就任して約1年が経ちましたが、全国各地の訪問や労働組合との対話など、国民と常に交流する統治スタイルを重視しています。全ての大臣や多くの幹部も、ツイッターやフェイスブックのアカウントを持ち、自身の活動を紹介するとともに、国民から意見や提案を受けています。今後、新政権にとっては経済分野の課題の解決が最優先であり、そのために科学技術研究、イノベーション、情報化社会への適応が重要になっています。

米国とは対話の用意がある

—オバマ大統領の歴史的なキューバ訪問（2016年3月）もあり、米国との関係が急速に改善するかに見えました。トランプ政権の発足により再び冷却化したように見えます。米国との関係の現状と今後の見通しについて教えてください。

大使 2014年12月、キューバ及び米国の両大統領が国交正常化交渉を開始すると発表したことは画期的でした。米国大統領がキューバと対等に対話することを受け入れ、キューバ政府の合法性と米国の対キューバ政策の失敗を公に認めたことはこれまでになかったことです。良好な雰囲気の中で様々な分野について活発な協議が行われた結果、2015年7月20日、外交関係が復活し相互に大使館を開設、環境保護、民間航空、郵便、農業等の分野で20以上の協定が締結され、人権問題を含む二国間・多国間の懸案事項を協議するメカニズムも創設されました。

しかし、2017年1月のトランプ政権の発足により、これまでの進展をすべて覆そうとするトランプ大統領の意図もあり、両国関係は大きく悪化しました。同政権は、根拠のない中傷や音響攻撃を口実に、駐米キューバ大使館の外交官の大多数を一方的に追

放したほか、ハバナの米国大使館の人員を大幅に削減しました。対キューバ経済制裁は、その域外適用を含め強化されました。キューバの205団体が追加制裁の対象となり、米国企業の活動がさらに制約されるとともに、観光旅行も規制され、米国人の来訪者は大きく減少しました。米国政府は潤沢な資金を活用して政治的な妨害活動を進める一方で、グアンタナモ基地の占拠を続けています。キューバ政府は、対話の用意がある、対立を望まない、しかし国内問題については交渉しない、米国のいかなる脅迫にも屈しないとの立場を繰り返し表明しています。

最近、国務省はヘルムズ・バートン法第3章（1996年から歴代政権が繰り返しその適用を延期してきた条項）の適用を発表しました。同条項は、1960年にキューバ政府により接収された資産の旧所有者がその資産を取引に使っている第三国の法人・個人に対し米国裁判所に損害賠償請求訴訟を起こす権利を認めるものです。トランプ政権は、国際法に違反し第三国の主権や利益を侵害する危険な一歩を進めました。キューバは傲慢かつ無責任な敵対的行為を強く非難します。昨年11月の国連総会で米国の対キューバ経済制裁を非難し即時撤廃を求める決議案が27年連続で可決されたことは、米国の孤立をあらためて浮き彫りにするものです。

米中関係は協力と対立の構図が続く

一ベレイラ・エルナンデス大使は駐中国大使も務められた中国通ですが、最近さまざまな分野で対立が見られる米中関係をどう見ておられますか。

大使 米国と中国は2つの大国として協力と対立の間を揺れ動く関係にあります。経済的な相互依存関係がある一方で、二国間関係や地政学的利害に由来する多くの摩擦要因があり、それを解決すべく首脳レベルの対話も行われています。米国にとっては、アジアの大国、中国の台頭は米国の世界覇権への挑戦であり、中国封じ込め戦略が必要になります。一方、中国にとっては、米国との適切なバランスの維持が戦略的に重要です。それは、自国の経済発展に専念できる平和的な国際環境を維持するとともに、中国の台頭は平和的であり、近隣諸国にとって利益でこそあれ脅威ではないことを示すという戦略の一環でもあります。

最近の米中貿易戦争は、相互に依存し合いながらも、常に協力と対立を繰り返す両国関係の一つの表

れと言えます。米国が中国のプレゼンスの増大に不信の目を向けるとしても、貿易戦争をエスカレートさせることは問題の解決に繋がらないのみならず、既に様々な緊張を抱える世界経済全体に悪影響を及ぼすおそれがあります。

多彩な外交関係90周年記念事業

一今年は日本キューバ外交関係樹立90周年ですが、昨年の日本人移住120周年に続き、要人往来や記念事業等の計画はありますか。

大使 2018年には日本人キューバ移住120周年を祝賀し、日本人移住者が文化・農業・漁業等の分野でキューバ社会に大きく貢献したことを顕彰しました。今年は日本キューバ外交関係樹立90周年を祝賀します。これまでに様々な記念事業が企画されており、例えば、東京等での文化フェスティバル、葉巻等の物産展、貿易投資セミナー、大学等での講演会、両国関係に関するドキュメンタリー上映などが挙げられます。また、今年末には、第9回二国間外交協議がキューバで開催されるほか、政治・経済分野のハイレベルの交流も続きます。中核的な記念事業は、外交関係樹立の日である12月21日に行われる予定です。

安倍総理訪問で二国間関係に弾み

一安倍総理大臣の史上初のキューバ訪問（2016年9月）等、両国関係強化の機運は盛り上がっていますが、経済関係については、様々な要因によって未だその潜在力に見合う水準に達していないと思われます。その打開策としてはどのようなことが考えられますか。

大使 安倍総理の史上初のキューバ訪問は、経済通商分野をはじめあらゆる分野で関係を一層強化するとその両国政府の意思を確認する機会となりました。その際、経済協力の新たな方向付け、キューバの経済制度の近代化、二国間債務繰り延べ等を含め、日本企業の参画にとって望ましい環境が醸成されつつあることが明らかになりました。同訪問以降、両国関係は政治分野はもとより、経済・通商・協力分野においても、総理訪問中に署名された合意が着実に履行されるなど、良好に推移しています。

国際協力機構（JICA）がハバナに事務所を開設したほか、新しい形態の協力が開始され10以上の案件が実施されました。日本企業のキューバへの関心が高まっており、ハバナ国際見本市への参加や駐在事

務所の開設、さらには数多くの企業ミッション派遣等が活発に行われました。昨年末の時点で、二国間貿易は20%増加しました。

昨年12月の第3回日本・キューバ官民合同会議で署名された日本・キューバ中期経済アジェンダと投資協定の予備協議の開始は重要な進展です。今後とも日本企業との緊密な接触を通じ、その関心や疑問に応えるとともに、二国間関係の新たな可能性を模索する専門家の往来や長期的な案件の実施を促す新たな融資スキームの検討などを促進していきたいと考えています。

正しい情報の発信に注力

—日本には、キューバ革命の英雄、野球、音楽、葉巻、ラム酒、観光などを通じ、多くの根強い「キューバ・ファン」がいます。今後の両国関係の更なる強化に向けて、貴大使が重視して取り組んでおられることは何でしょうか。

大使 私達の大使館は、あらゆる分野で日本との対話と協力を促進し関係を強化すべく努力しています。特に、キューバに関する正しい情報の提供を重視しています。それは、日本の皆様のキューバに対する高まりつつある関心に答えるだけでなく、日本の

マスメディアにおけるキューバや他のラテンアメリカ諸国に関する情報の欠落や曲解を是正する必要がありますからです。ソーシャルネットワーキングサービス等を活用するとともに、マスメディアやキューバの友人達との直接的な対話も積極的に行なっています。今後とも日本社会の各層の人々と交流を深めていきたいと考えています。

読者へのメッセージ

—『ラテンアメリカ時報』の読者に対しメッセージがあれば、お願いします。

大使 ラテンアメリカ協会が60年間にわたりラテンアメリカとの交流促進に貢献してきたことを高く評価しています。また、読者の皆様にはぜひキューバを訪問していただき、独特な文化と歴史、豊かな自然、明るくホスピタリティ溢れる人々などキューバの魅力を体感していただきたいと思います。

(注) ラテンアメリカ協会のHP英文サイトの JALAC Articles 内に、本インタビューのスペイン語全文を掲載しています。

<https://latin-america.jp/en/archives/category/jalac>

(佐藤 悟 ラテンアメリカ協会副会長)

ラテンアメリカ参考図書案内



『僕は、社会主義国キューバから、日本へやって来た。—地球の裏側で見つけた恋—』

アメッド・アルメンテロス・ロドリゲス、大賀あずさ 産業能率大学出版部 2018年12月
165頁 1,300円+税 ISBN978-4-382-05758-6

福岡県出身で高校時代にバルセロナに、大学時代にニューヨーク市立大学にそれぞれ留学経験があり、メキシコのカンクンでの旅行ガイドとして働いたあずさが、キューバへ一人旅しサルサを習いに行ったところそのスタジオでサルサを教えていたアメッドと出会い、ハバナ大学法学部を卒業して弁護士資格を得た彼が初めて出国して日本に来て2年間日本で共に生活、その後はアメッドがカナダのモントリオール法学院の入学許可を取得したことから現在は二人で同地に在住している。

本書は、アメッドが「僕の生まれた国・キューバ」で生い立ちの段階とともにキューバの教育・医療システムの実情、一般家庭の食事情と料理、徴兵制による兵役経験、ハバナ大学法学部に入ってから大学生活、その中でサルサとパーカッションを教えるアルバイト（これがきっかけであずさと知り合った）、人種差別事情を話させ、キューバの社会主義がどういうものかを質疑応答形式で語らせている。コラムとして、キューバの名付け、結婚・離婚事情、性文化の説明も付けている。後段97頁以降は二人の対話を通じて、国際結婚事情、異文化の交差、キューバ人の旦那から学ぶこと、アメッドが語る日本での生活で感じた事なども付している。

日本人とキューバ人との出会いと結婚を軸に、キューバの日常生活や社会の実情を分かりやすく、楽しく解説している。これまでのキューバ旅行ガイドや解説書とは一風変わった切り口での紹介書。

(桜井 敏浩)